



石川直樹

いしかわ・なおき

写真家。東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2000年、「Pole to Poleプロジェクト」に参加して北極から南極を人力踏破。01年、7大陸最高峰登頂を達成。人類学、民俗学などの領域に関心を持ち、辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、作品を発表し続けている。写真集『CORONA』（青土社）により土門拳賞を受賞。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』（集英社）ほか多数。

## インドの雑踏で鍛えられた英語力

今から20数年前、高校2年生の夏休みに1か月間インドとネパールを一人で旅した。もちろん海外一人旅はそのときが初めてだった。

テスト対策のために覚えた単語や文法は、いざとなるとまったく口から出てこなかった。ましてや、インドとネパールである。現地の人々の口からも教科書に出てくるようなセンテンスは一切出てこないのだった。

インド人は“R”を「ル」と発音することが多く、例えば“international”は「インテルナショナル」となる。自分から話すことも、相手の言葉を聞き取ることもままならず、現地で1か月間もよくコミュニケーションをとっていたな、と我ながら感心する。

17歳のときのインド旅行で頻繁に使ったのは“Don't cheat me. I know the price.”（ボるなよ。おれはちゃんと値段を知っているんだからね）などといった、ちょっとエグイ感じの値段交渉に関連する言葉ばかりだった。

リキシャに乗るとき、あるいは路上や露店で何かを買うときなど、正規の運賃や金額というものが一切なかった当時のインドで、まず必要なのは値段の交渉力だった。

インドの洗礼を受けたおかげで、今はアジアでの買い物はお手の物だ。押すときは押すけれど、相手を不快にさせるほどは押しすぎない。引くときは引くけれど、相手の気持ちをうまく掴みながら引く。それもこれもインドやネパールの客引きや店員から学んだものである。

最初は旅人を騙してお金をとろうなんてけしからん、と思っていたのだが、今では無理やり納得することになっている。物の価値が異なる国からやってきた他者に対して、少しでもお金をとってやろうと思うのは、彼ら彼女らの生きるための術の一つなんだろう、と。

旅先で英語を使ってコミュニケーションをとることは、つまるところ、世界の多様さを体で学ぶことにほかならないとぼくは思っている。